

令和6年度ときめき短歌大会入賞作品一覧

【最優秀賞】

冷蔵庫に生酒忍ばせさつさうと夫トラクターで稲田に向ふ

林千恵美

〈講評〉 光山 半弥 先生

さあ行くぞ！稲田が待っている。トラクターを馳せ出掛ける姿がある。夕食の冷酒が楽しみだ。全体に満ちた活力と整えた調べに好感を持つ。見守る妻の安堵を感じる。

風邪引くな転ぶなといいて帰りゆく乳房一つと胃のない娘が

川野忠夫

〈講評〉 細野 美男 先生

高齢者の風邪や転倒は、肺炎や寝たきりなどの重症化につながるおそれがあふれている。自身も健康体ではない娘さんの言葉は、しみじみと親を気づかう心情にあふれている。

【優秀賞】

力なく萎えし両足引きずればイチニいちにの妻の掛け声

小澤元雄

〈講評〉 濱野 シズ江 先生

長年連れ添ったご夫妻の歴史を感じさせる。イチニの掛け声はどんな良薬より元気の出る薬であろう。奥様への感謝の気持も伝わって来る思いの深い歌である。

お父さん大丈夫だよねメス入れる不安を夫に半分あづく

松下昭代

〈講評〉 光山 半弥 先生

思いもよらない夫の手術、もしやの心が浮き不安が過る。「夫に半分あづけ」己の心を鎮めている。日頃信頼していればこそ。夫も安心して手術を受けた事でしょう。

蕎麦を打つ嫁と姑の後家同士わだかまりなき齢となりて

吉原道子

〈講評〉 阿部 栄蔵 先生

後家同士の嫁と姑が、蕎麦を打つという。寂しく、辛い内容をさらりと淡々と表現している。深い思いが、伝わってくる。下句がよい。特に結句が歌を締めている。

【優秀賞】

ひもすがら初めて仕込むたくあん漬け亡夫の手書のメモを頼りに

佐藤結美子

《講評》

岡田 正子 先生

無駄のない表現を通して、その背後をよぎる作者の思い出や心の動きが窺え、夫への挽歌と言えよう。「ひもすがら」の語が生き、倒置された下句が効果をなしている。

今はただ思い出の中に生きている施設の窓に春の星々

松本浩子

《講評》

阿部 栄蔵 先生

家族から離れて施設に入所している作者は、今はただ思い出の中に生きているという。切ない寂しい思いが、伝わってくる。下句が、特に結句が、効いている。

【奨励賞】

玄関に二つ椅子あり父と猫の日向ぼつこの指定席なり

堀口りつ子

《講評》

濱野 シズ江 先生

玄関に置かれた二つの椅子は父と猫との繋がり場所。忙がしい日々の中でこは時の流れがゆるやかに感じる。読者もこの空間に癒される。歌はほっこり温かい。

今日一日誰れも逢わない話さない風なき真昼ゆるる風知草

塚越郁子

《講評》

岡田 正子 先生

来客も電話もない。そんな独り居の情感を風知草と重ね、「風なき真昼ゆるる」が、作者の心情を詩的に代弁した。その心情の繊細さを風知草と関わらせたのが絶妙。

久しくは手をつなぐこと無かりしが電車の旅に妻の手を引く

近藤周雄

《講評》

濱野 シズ江 先生

旅に出た開放感。旅という非日常の中では思いがけない事も起る仲のよいご夫婦の旅が思い出深い旅となるよう願う。細やかな優しさが心に沁みて来る。

【奨励賞】

「待て待て」と幼な追いかく祖母らしき我にはついに縁なき場面

藤原佳子

11

〈講評〉 阿部 栄蔵 先生

幼を追いかける。祖母らしき人の姿を見ての思い、感慨を表現している。下句は高度な表現。下句によつて、作者の境遇が、いろいろ想像される。

綿入れの絆纏傍への枝にかけ爺は梅の剪定をなす

大久保麗子

12

〈講評〉 濱野 シズ江 先生

熱心に梅の剪定をする澆刺とした爺の姿と、今は懐かしい綿入れ絆纏の取り合わせがうまく歌にふくらみをもたせている。情景が鮮やかに浮かび元気を貰う歌である。

病める吾に粥焚く父はことごとと廚に音す母逝きし今

小渕霽月

13

〈講評〉 細野 美男 先生

頼りとすべき妻に先立たれ、男手で作る病む子への粥。無骨さのなかにも父親の温もりや優しさが伝わる。ただし、粥をたく場合の「焚く」は「炊く」が望ましい。

農を継ぐ子なきままに喜寿迎へ稲と蕃茄の注文書出す

倉沢美代子

14

〈講評〉 濱野 シズ江 先生

年齢による体力の衰えや後継者のない将来の不安を抱えながらも体の許す限り頑張つて続けてゆきたいという気持が伝わってくる。しみじみとした奥深い歌である。

坂道や階段あれば手を延べて吾をサポート孫さりげなく

二渡静江

15

〈講評〉 光山 半弥 先生

優しいお孫さん。日頃の楽しい生活が想像できる。一寸した優しい心遣いでも嬉しい。何となく過ごしている日常生活。一つ一つの優しさが人心を捉え、心温まる。

【奨励賞】

帰ろうよ一緒がいいと言う母に心でわびて「施設はいいよ」

佐藤芳江

《講評》 光山 半弥 先生

長年暮らした家を離れ、家族と離れ離れはとても寂しい。家族とて同じである。母と息子の言葉は立場を越えて素直に表現されている。大勢の友と楽しく過ごそう。

甥の娘をそつと渡され顔見ればお宮参りの亡き吾子浮かぶ

高橋伸治

《講評》 阿部 栄蔵 先生

お宮参りの帰りか。生後間もない甥の娘を抱いたとき、今は亡き吾娘のお宮参りの姿が浮かんできたという。いつになつても癒えることのない、逆縁の悲しみの歌。

【佳作】

母の日より父の日寂し三人子はみな父となり今宵来たらず	善如寺裕子	18
陽に干せる布団に憩ふ秋茜をりをり小さく趨をふるはず	木村あい子	19
認知なるも杖をつきても母さんと呼べるあなたに永らへて欲し	掛川真由美	20
前をゆく老いの歩みのたどきなさに重ねゴミ捨てにゆく	車崎椒子	21
逝きてより幾日をたつや我が部屋の娘のうつし絵の笑顔のやさし	細井二三四	22
居ぬ事に未だ慣れずして何となく相槌求め振り返りたる	長谷川幸枝	23
山辺の石の仏の足元に日本すみれの群なして咲く	森千代	24
老い二人「旨い」で締める夕飯が平凡な日を上出来にする	福島三穂子	25
意を決し脳死の検査行へりいまだ温もるICUの患者	山口登美江	26
三人を先に送つて逝くのだよ末の私に姉たちは言う	島野信美	27
寝てすぐに軽い鼾の妻をみて日頃の家事に労いもちぬ	小澤次男	28
こもりがちな夫を時々誘い出すバラがきれいよ紅葉見頃よ	齋藤邦子	29
看護人も看護らる人も泣き笑い介護十二年命愛しみ	金子睦子	30
奥つ城を訪へばかたかた一斉に塔婆なりたり武尊の風に	瀧田茂子	31
木末には銀の蕾が春を待つ明日は伐らるる木蓮大樹	中野澄江	32
老いの身に次々迫るデジタル化説明書読むも理解くるしみ	手塚光子	33
終活をせまる娘がおしげなく切りし紫陽花新芽顔出す	川西富佐子	34
いつ迄も学ぶ心を忘れずに喜寿の今年は漢詩に挑む	志田貴志生	35
麻痺を病むこの脚先で夢路でも走つて見たしまた脚のつる	野口弘	36
補聴器は雑踏まるごと掬ふなり君のささやきのみ受けたきに	中澤ひろみ	37
ぼんやりと稲田に灯る誘蛾灯父母恋しかの日の小道	石関順子	38
白しらと八つ手花咲き冬ざれの庭に小さき明かりを灯す	根岸節子	39
掴んだら儚く消えるしやぼん玉そつと手を出し待ち伏せしよう	野口和子	40

【群馬県長寿社会づくり財団理事長賞賞】（最高齢者男女各1名）

〈男性〉

原爆の悲しみ嘆きの無き平和自由の世界に明るき生活を
安らかに生きゆく日々を想いつつ青き地球に生きてゆきたい

藤村利男

100歳

〈女性〉

慰霊祭あれど帰れぬはらからの七十九年の墓を清めり
百歳を迎へる吾や百日紅は猛暑を堪へ健気に咲くよ

磯つね

100歳

【ときめき賞】（理事長賞を除く年齢上位者男女各5名）

〈男性〉

トンビ群れ何を舞う観客無きも果てなく続く
澄める空映える山なみ風香る被災無き地に生る幸わせ
列をなし元気に登校する子らに道ゆずりやり笑顔にて待つ
機械化の以前の稲刈り語れども孫は全く理解せぬ顔
病める吾に粥焚く父はことごとと廚に音す母逝きし今
売り上げの少なきけふも愚痴云はず政見放送に父は聞き入る
気遣ひて巢より離れて降りるてふ習ひや賢し揚げ雲雀
黙然と施設の人は朝餉待つかつての生活いかにと思ふ
里山の朱く染まりし今頃は多忙な母のエプロン姿
亡き母の旅立つ前に添い寝したエプロン姿を過ぎる

岩田繁

95歳

研石

93歳

小淵霽月

91歳

西林乗宣

91歳

青木文夫

91歳

〈女性〉

孫からのレース飾りのブラウスを乙女のごとくはにかみつ被る
敬老日子・孫・曾孫に囲まれて写真を撮れば元気出るなり
海の無き里に十年や朝夕の潮香波音いと恋しかり
熱帯魚馴染みとなりて六年かなお目当魚に挨拶をしぬ
からからと高木に残る葉のいくつ赤城風に吹かれておどる
逝きてより幾日をたつや我が部屋の子のうつし絵の笑顔のやさし
天高く棚田の祭り杵の音手作り神輿太鼓の響き
吾老いしグラウンドゴルフ健康に目標めざし読書いそしむ
転ぶまい転ぶまいぞとひたすらに心ひき締めけふも過ぎゆく
逢いたくてけふも来たよと娘の言葉嬉し涙をそつと拭きける

笠原照代

99歳

久岡千代子

98歳

細井二三四

98歳

須田和子

98歳

黒田清子

98歳